

## パイプは男根か

y. s

最近清友会東京支部より原稿を頼まれ、当たり障りのない話でお茶を濁したが、これをもう一度やるのも気が引ける。常日頃パイプスモーキングは文化であり、パイプは造形芸術であるとも思い、私の人生にとって欠かせないものとなっているので、書こうと思うとその切り口は数知れないのだが、どうももう一つインパクトにかける。

そこでどうせ書くなら私が信じて疑わないパイプについての持論を展開してみようと思う。それは今回のテーマ「パイプは男根か」である。



私の傍らに常に控えているパイプは潜在的に男根の象徴化されたものであると思う。男性のそれは人間にとって、男にとって、勿論女性にとってもこの上ない重要なものであり、人類の歴史の上でも男根崇拜は根深い存在となっているが、これをパイプと結びつける人は多くはない。

過去にそれを指摘した文章を読んだ記憶はあるのだがそれが誰でどこで書かれていたか定かでない。しかし考えてみれば考える程、形の上からもその象徴的存在からもそう思われて仕方がない。そこである博識のパイプスモーカー、彼は有名新聞の記者でパイプの歴史にも詳しいのでこの点を聞いてみたところ、フロイトはシガー（葉巻）派であったが弟子のユングはパイプ党だったかもしれないので彼の文章の中にこの指摘はあるかも知れないとのこと。私が何故このことが気になるかというと、

日頃絵を描きながら、現代に絵を描くということは何なのかを自問自答する時、行きついた一つの点は、現代の芸術は官能性が強く表現されている特徴があり、セクシーであることが現代芸術の必須条件ともなっているということである。マーラーの5番第4番楽章は官能表現そのものであり、ジョージア・オキーフの絵は女性の性器そのものだ。現代芸術はその底に強く官能美が存在しなくてはならぬ。そう思っている自分はパイプにひかれる理由をこの事に結びつけることにやぶさかではない。ハンドメイドパイプの天才と云われる J・ミッケが創り出す金魚と呼ばれるシリーズがあるが、これをある人は女性のお尻といい、ある人は桃割れと呼ぶが私に云わせれば、これは正に男根の象徴であり、そのものでもある。このことがあれだけパイプファンを熱狂させたと思わずにはいられない。パイプは喫煙のための道具ではあるが、同時に人間が作りあげた美しい現代に生きる芸術品でもあり、それが人体の一部となってパイプを銜えるそのシルエットは多くの画家の絵や映像となって大きな役割を果たしてきた。このたばこ排斥の気運の世の中でもパイプは格好いいと云われたり、女性からも素敵だと云って頂くことがある、その奥には気付かれないままにこのような意識が働いているのではないかと現代を分析してみるのには考え過ぎだろうか。年老いて元気がなくなってしまった自分は、せめてピンと立ったパイプを銜えて背筋を伸ばして毎日を過ごしたいと思うのである。

